

軋む社会

教育・仕事・若者の現在

本田 由紀 著

本誌1月号より、本田由紀氏による論説「若年労働者の現状と高校教育の課題」が連載されている。時あたかも、非正規職員に対する派遣切りや大企業等による人員削減の嵐が吹き荒れ、社会とりわけ若年者の不安を一気に高める時期に重なっている。この様な折に、本田氏の論説が掲載されたことは、編集委員の卓見であると感謝申し上げたい。

氏の論説は5回連続となるとのことであるが、氏の論説にある主旨を更に深く掘り下げたい、あるいは、閉ざされた社会の要因が何処にあるのか、それを解く鍵は何なのかなど、これからの社会に光明を見いだしたいと願う読者にとっては、今回紹介する著書の一読をお勧めしたい。

氏は本誌のタイトルによせて「夢を持ってない。将来の展望が見えない。希望が見いだせない。そんな若者の声が聞こえてくる。こんな社会に誰がしたのか？ 社会の軋みをなくすための糸口はあるのか？ あきらめと失意、そして絶望が渦巻くこの社会を変えていきたい。未来を支える若者が、生きやすい社会をつくりたい。そんな思いで、この本をつくりました」と述べている。

若者が何故不安感を持つのか、氏は多くの論文やデータを根拠に、学歴社会に対する社会の変遷を取り上げ、社会に根付いた業績主義の負

の面に若者たちも気がついたことに触れ、不安解消への道筋を示している。そして、「いまこそ専門高校の復権を」の項では、「忘れられた存在」からの脱却を唱えている。そこには、専門高校を就職にも進学にも高い有効性を持つ教育機関と位置づけ、義務教育終了直後における専門高校の有効性を示す一方で、専門高校で学んだ分野に直接あるいは間接的に関連する分野に進学し、更にそれを深化させる学習や研究を行うことは、若者にとっても社会にとっても極めて正当な進路の在り方であると断じている。そして、このことを広く主張し、大学等との連携の下その様な機会を拡大していくことが不可欠であると、テクノロジスト（直接この言葉は無いが）の必要性を述べている。更に、専門高校の地位を向上させ、また、量的にも拡大していくべきであると述べるなど、工業高校への熱きエールが記載されている。

私自身、米国の金融政策のおりを受けて、ものづくりの現場までが苦境に立たされていることに強い憤りと危機を感じているが、このまま座したまま変化を期待しても何も解決しない。今こそ生産現場が社会をリードし世界を再生しなければならない。その本質が何処にあるのか、再生のためには何処へメスを入れなければならないのかを本誌より読み取っていただければ幸いである。

氏のコメントにも、「社会は変えられる。問題に対処することが出来る。そう信じて動くこと、答えはそこにしかありません。」と結んでいる。

(双風社, 255頁, 1890円) (毛利 昭)